

エメラルド・シティ シアトルより

University of Washington

吉川 容司

(九州大学医学部病態機能内科学講座)

2021年4月よりアメリカ合衆国のシアトルにあるワシントン大学で研究留学をさせていただいております。シアトルには現在のポストとのジョブインタビューの時に初めて訪れたのですが、ダウンタウンの高層ビルの先に広がるワシントン湖の景色を見た瞬間から「この街で働けたらいいな」と思いました。その都会と自然がうまく調和している街並みは、今思い返してみると生まれてから留学まで九州の福岡で過ごしてきた私にとって、福岡と同じような空気を感じたのかもしれませんが。街はシアトルの方がかなり大きいのですが、30分から1時間ほど車を郊外に走らせれば海や山などの大自然が広がる場所は福岡に似ており、実際に福岡に似ているという日本人にも何人か出会いました。秋から冬にかけてほぼ毎日シトシトと降る雨のおかげで緑がとても豊かなシアトルはアウトドア好きな人にはお勧めの街です。特にマウンレーニアはシアトル市内から車で2時間程度で山の中腹の絶景スポットまで行くことができますのでシアトルに行く際にはぜひ立ち寄ってみてください。6月下旬から9月上旬までの夏の時期が気候も良くベストシーズンです。

私の研究室は血液脳関門の血管透過性を専門領域としています。血液脳関門の破綻は脳卒中分野で病態増悪因子として語られることが多いのですが現在はアルツハイマー病との関連に着目し、アルツハイマー病と血液脳関門の破綻について研究を進めています。研究室のボスはインタビューをしたその晩に二人きりでディナーをご馳走してくれたり、ラボでいつも気にかけてくれたりととても温かい人でした。私の父と同じ年齢でだいぶお年を召されていましたが、実験結果を受け取ると興奮して嬉しそうに鼻歌を歌いながらすぐにディスカッションを行ったり、常に「Science is fun!」とニコニコしながら語ってくれたりといつも研究に素晴らしい情熱を注ぐ姿勢を持っておられ見習うところが多くありました。こじんまりとした研究室でしたがボスの情熱を含め、研究室の雰囲気は留学を行うにあたってとても大事な要素だと思いました。また、アメリカは各国から人が集まることもあり優秀な研究者がとても多く、日本人研究者も野心や向上心が強く大変刺激になりました。日本国内も素晴らしい研究者や研究施設は数多く存在しますが、様々な研究者と出会い、多様な考えに触れるにはやはり海外の方が機会は多いと思います。

さらに、職場で出会う人だけでなくアメリカは多民族国家で様々な人、人種がいます。頭では分かっていた事ですが、思っていたことと実際に生活をして肌で感じることには大きな違いがありました。周囲は違って当たり前であるからこそ自分がどうしたいのか、どう

いう考えなのかをしっかりと持つことが改めて重要であると感じましたし、海外留学を通じて日本で当たり前であることが違うといった経験や、子供の教育方針の違いなど、実際に海外で暮らすことで様々なことに気づけたことは非常に良かったです。

最後になりますが、円安や物価上昇の中、金銭面での支援は大変助けになりました。ご支援いただきました上原記念生命科学財団の皆様に深く御礼申し上げます。



圧巻の景色 マウントレニア